

国語

I

出典

八木沢敬『はじめての科学哲学』（第4章 理論をどうやってつくるか——説明と理論 2 観察の理
論負荷性）（岩波書店）

解答

問1 1—③ 2—② 3—⑥ 4—④ 5—① 6—⑤
問2 ②

問3

ア—④

イ—①

ウ—⑤

エ—③

問4

A—③

B—⑥

C—⑦

D—⑤

E—④

問5

④

問6

③

問7

一番目…①

二番目…④

三番目…③

四番目…②

問8

⑤

問9

①

問10

④

問2 傍線Aを含む段落の次段落で「この主張」の内容について検討されている。「人間の知覚経験」が「主観的」で

「非中立的」だという「主張は正しい」が、「科学データ収集という特定の行為」も『中立的』でなく『主観的』で「そのおなじ意味で『客観性を欠く』」としている。「おなじ意味で」というのは「この主張」もおなじということ。

そこで、その次の段落最後で、「その主張をするという行為自体…その主張は自己反駁的なのだ」と述べている。「自己矛盾がある」とした②が適切。

問5 空欄I前後の「視覚経験は…主観的だが…」I判断だ、といわねばならないわけではないという文脈を

正確に押さえること。後ろで否定されていることに注意する。「主観的」と同内容の言葉が入るはずである。

問6 「間主観性」が「個人のバイアスを超越する役割」になるということについて考えること。空欄Iを含む段落に

「『間主観的』な一般性があるという意味で『客観的』だといえる」とある。③の内容が適切である。

①「神の立場から得られた客観的事実」が不適。

②「わずかな客観性を総合する」が不適。

④「やむをえず…決定している」わけではない。

⑤「客観性を強引に確保する」が不適。

問7 空欄甲の直前で「観察を拘束する…要因とは、理論である」と、「理論」について触れているので、理論が観察を

拘束するということを話題としている①から始まるはずである。「さきに観察そのあとで理論」という内容が①なので、次に④がくる。空欄甲の後で具体例が挙げられているので、「いくつかの例によつてはつきりさせることからはじめよう」という②が四番目になる。

問8 傍線Cの直後に「観察内容——は観察主体であるわたしがくだす判断の内容」で、それは「情報処理が生んでおわる情報内容ではない」とある。この内容に合致する選択肢は、「情報として処理するだけでなく、観察する主体が…

判断をくだす」とした⑤である。④は前半の内容は正しいが、「解剖学的部位を介さない」が不適。

問9

後ろから四段落目で説明されている内容を押さえること。「観察の理論負荷性によると、そのような観察経験はある意味での『理論』を仮定」しており、その「理論」は「意識的に主張されている言明」だけではなく、「無意識に前提されている一般的・体系的な信念（の集まり）もふくむ広義の『理論』」である。「意識的にも無意識的にも、観察者のもつ数多くの概念を前提」としている①に合致している。

②「観察者のもつ信念に左右される」が不適。

③「無意識的な信念に支配されている」が不適。

④「観察」は「知覚という現象にすぎない」ではない。

⑤最終段落に「無数の概念に支えられた」とあるので、「ある特定の立場からみた無数の概念」は不適。

問10

「理論が知覚に影響をあたえることはない」ことと「観察経験が理論の影響を受けない」ことは関係がないので「証明」にならないという④が合致する。

①「主観的である人間行為」の「すべて」が「科学的」だとは言っていない。

②「主体によらず一定の視覚経験をもたらす」が不適。

③空欄C前後の「神の立場からのみ得られる知識：そのような前提をマジメに受け入れる人間はいないだろう」に反している。

⑤後ろから四段落目に「観察者がある特定の種類の『世界観』をもつことが必要だ」とある。「間主観的な…前提に成り立つ」というわけではない。

II

出典

『宇治拾遺物語』〈巻第三〉

五 鳥羽僧正、国俊と戯れの事

解答

問1 ④

問2 a ② b ⑥ c ①

問3 い ③ ろ ① は ④

問4 ⑤

問5 ア ② イ ⑤ ウ ⑤ エ ① オ ②

問6 ①

問7 ③

問8 ②

問9 ②

問10 ①

解説

問1 傍線Aの直前の「待ちゐたるに、二時ばかりまで出であはねば、生腹立たしう覚えて（＝待っていたのに、四時間ほどまで（待っても）出てこないの、非常に腹立たしく思つて）」から考える。④が正解。

① 「『お待ちください』という旨の伝言を受けたこと」を「失礼だと思つた」わけではない。

② 「もてなしがなかった」ことに腹を立ててはいない。

③ 「予定の時間が迫ってきてしまった」が不適。

⑤ 「雑色の様子が心配になった」わけではない。

問3 い、「早う」は、はやくに、とつくにの意の副詞。「奉る」は謙譲語の場合もあるが、ここは、乗るの意の尊敬

語である。

ろ、「うちさし退きたる人」は、^ゝかかわりの疎遠な人^ゝの意。

は、「はしたなし」には^ゝはげしい^ゝきまりが悪い^ゝ無愛想だ^ゝなどの意味があるが、程度を越えたいたずらをしたということ、ここは^ゝはげしい^ゝの意で、④の「度を超した」が適切。

問4 傍線Bの直後の「『御車をかく召しの候ふは』と、我にいひてこそ貸し申さめ」から考える。「御車をこれこれの理由で（借りたいということ）お召しになっております」と、私に言ってからお貸し申し上げるべきだ^ゝと言っている。

問5 ウ、「困^{こづ}ず」は、非常に疲れる^ゝの意。

エ、「ゆくりなし」は、^ゝ軽はずみだ、不注意だ^ゝの意。

問6 空欄アの前に、僧正の習慣として「湯舟に藁をこまごまと切りて一はた入れて、それが上に藁を敷きて」とある。陸奥前司が、実際に「藁を引きあげて」見たところその中はどうなっていたのか。空欄アの次の文に「この藁を」とあることから①が正解。

問7 空欄イの直前に「尻骨を荒う突きて、年高うなりたる人の、死に入りて」とある。「死に入る」は^ゝ氣絶して死んだようになる^ゝの意。

問8 「湯舟に湯涌を下に取り入れて、それが上に囲碁盤を裏返して置」いたことによって覚猷はどうなったのか。②が正解。

①「藁を取り除いて」困らせたわけではない。

③「湯舟に飛び込んだ…その勢いで湯涌を壊し」たわけではない。

④「入浴の時間を台無しにしてやるため」が不適。

⑤「湯舟の床に頭を打ち付け、死に至らしめるため」が不適。

問9

雑色の報告を聞いて「いかにせんと思ひまは」した挙句、湯舟にいたずらをしていることから、②が正解。

- ①なぜ「小御門より出でん」と言ったのか、理由は明らかにされていない。
- ③「藁」を「帰ってきたら渡すつもりだった」ということはない。
- ④「例の事なれば、衣脱ぐ程もなく、例の湯殿へ入り」とある。
- ⑤「作者は人を待たせてはいけないという教訓を述べた」が不適。